

8. 文芸上の異物

古今の伝奇文学の中には、たくさんの異物がある——怪異精霊の出現は、唯物的な人々から見れば、いずれも荒唐無稽の話で、たといすぐには排除することはなくても、要するにまったく無価値なものである。しかし唯物論の論断は文芸批評の基準とすることはできない。そして文芸の鑑賞に心情による体得を用いなければ、“琴柱に糊して”すべての叙述を皆真理と事実としてしまい、歴史と科学としてそれを研究するのは、もともと自分から道を誤り、正当な理解を得られないのは怪しむに足りない。伝奇文学にどんなにその欠点があっても、因習の規範から飛び出し、どんな奇異な材料でも自由に採用し、得んと欲する効果に到達することができることをその目的とするのは、一大改革で、文芸の進化の上での顕著な里程標だと言わざるを得ない。こうした例は甚だ多く、いまはしばらく異物の中から最も恐ろしいもの——^{キョンシー}僵尸——を取り上げ、一例とする。

中国の小説に出現する僵尸は、全部で二種ある。一つは尸変〔屍体の化けたもの〕、死んだばかりの人が突然“凶暴の氣”に感じて、立ち上がって亡霊となり、いつも生きた人間を殺すから、その性質はとても凶暴である。一つは普通の僵尸で、長らく仮もがりのまま埋葬されなかった死人が化けたもので、性質はやはり凶暴で、またいつも旱魃の神とされ、雨を止めることができる。しかし一方また恋愛事件の伝説もあり、性質は少し穏やかな色彩を帯びている。中国の僵尸の物語はたいがい恐怖の感情を感染させることがうまく、意義を捨てて技巧を問題にするなら、成功したものである。『聊斎志異』に「尸変」というのがあり、旅人が一人で宿に泊まっていると、死んだばかりの旅館の息子の嫁に襲われ、野外に逃げ出し、一本の大きな木の陰に隠れ、お互いつつぱりあっていたが、最後には怖さのあまり地面に倒れ、屍体も木に抱きついたまま硬直する。わたしがこの篇を読んだのは二十年余り前だけれども、その時の恐怖の心情はまだ忘れない。これは一篇の有力な怪談とすることができるだろう。児童文学の恐怖分子は、たしかにあまり適当ではないが、もしふつうの文芸作品なら本来あるべきもので、アメリカのアラン・ポーの小説にはこうした分子がたくさん含まれており、モーパッサンにしても若干の怪談を書いているが、彼らは心理の内面描写を多用しており、方法にいささか違いがある。

外国の僵尸思想は南欧と北欧の二派に分けられ、ギリシア及びセルヴィアをその代表とする。北派の通称はヴァンパイア(Vampyr)、墓から出て、生きた人間を迷わせ、その血液を吸う、吸われた者は死んでまたヴァンパイアになる。またオオカミつき(Lycanthropia)になる者は、俗にオオカミに化けることができ、死後亦僵尸になると思われ、それであるいは“人狼”(Vljkodlak)と混同されることがあり、性質は凶暴で、中国の僵尸と似ている。南派のはギリシア古代にアラストール(Alastor)と言われ、現代ではスラヴの名“フリカラカス”(Vrykoalkas 原意は人狼)を襲用しているけれども、方言の“鼓様”(Tympaniaios)や、“口を開けた者”(Katachanas)などの名前からすると、壊れてなくて行動できる屍体というに過ぎない。やはり妖異ではあるけれども性質は穏やかで、民間伝説ではいつも家に帰って普通の人の様に起居していると言うから、まさしく“生きた屍体”である。その死後に戻ってくるわけは、たいがい精気が尽きていない

か恨みを晴らしていないかで、横死あるいは若死にの人が多い。古ギリシアのアラストールの意味はもともと遊行者であるが、ただ遊行の目的は大半その仇敵を追求するにあつて、後人はこのことばを“報復者”と解釈している。したがって多少とも殺伐な気質が加わっている。ギリシア悲劇ではこうした類の思想はしょっちゅう見られ、例えばアイスキュロス (Aischylos) の慈悲の女神 (Eumenides) の中に最も顕著である。エリニュス (Erinys) の歌う“お前が流した血のために、お前はわたしにお前の生きた体の赤い汁を吸わせる。お前自身は必ずわたしの肉となり、わたしの酒となるだろう”がその好例である。オレステス (Orestes) は父の仇に報いるためにその母を殺す、母の怨霊はエリニュスの手を借りて報復しようとする。民間の思想では報復しようとする者はもともとその母の僵尸であるが、ただ芸術の関係から報復の神エリニュスに代えてある。これはギリシアの中和の徳の一例である。だが恐怖は依然として存在し、民間信仰を使って正義を表す。これはアイスキュロスの特徴と言える。近代のヨーロッパ各国にも類似の“遊行者”の思想はあり、イプセンの戯曲『群鬼』では繋げて言及している。この篇名はもともと『帰ってくる者』(Gengangere) で、つまり死んでまた出て来る僵尸であつて、決して肉体と分離した鬼魂ではない。第一幕でアーウィン夫人が息子と女中がふざけているのを見て、“幽霊、幽霊！”と叫ぶ意味はつまりこれである。この幽霊 (Ghosts) という言葉はまさに“「死人の中」から帰ってきた人々”(Revenants) と解すべきである。チュートン族の叙事民歌 (Popular ballad) にもこうした“帰ってきた者”はとても多い。たとえば『門子井の妻』[The Wife of Usher's Well] 一篇は、死者が母子の愛のために、兄弟三人が一緒に彼らの老母を訪問することを記している。しかし恋愛によって帰ってくるものも特に多い。『愛すべきウィリアムの魂』[Sweet William's Ghost] は、墓から出てきて、その恋人にその誓いを行わせようと問い、一首の極めて凄艶美麗な民歌を作り上げている。ウィリアムは云う、“もし死者が生者のために来るとしたら、わたしもお前のために帰って来よう”と。この死者が死に後れた恋人を迎えに来るという趣意は、『ソウクの奇跡』の中心となつて、多くの近代の著名な詩編を引き出して、怪異な事柄を運用して、死よりもさらに強い愛の力を表している。これらの民歌の中で、表面上はただ鬼魂をいうだけのように見えるが、実際はすべて“遊行者”の類の異物であつて、『門子井の妻』の老母はその息子が海で死んだと聞き、彼女は呪つて、“風が止まないように、波が静まらないように、わたしの三人の息子たちが「彼らの」この世の血肉ある体を持ってわたしのところへ戻って来るまでは”と云うのは、つまり明白な証拠である。

民間の習俗は大抵が精霊信仰 (Animism) に基づいており、事實は文化の発展にすこぶる障害となつている。だが芸術上から平心に見ると、われわれは怪異の伝説の中に人類共通の悲哀と恐怖を読み取ることができるのは、無意味なことではない。科学思想は文芸のなかに入り、若干の変化を起こさせることはできるが、決して完全にそれを占有できない。なぜなら科学と芸術の領域ははるかに違うからである。冥器の人面獣身、独角有翼の鎮墓の異物は、常識では全て虚構の偶像であることはわかっているが、芸術としては、自ずからその価値があり、唯物的判断で論定するのは不都合である。文芸上の異物思想もまさにそのとおりである。各人が文芸上その主張をするのはよいが、同時に広い心と理解の精神で以て一切の作品を鑑賞しないわけにはいかない。さ

すれば文芸の真意に通じ、それを理解することになる。アンドレーエフは『七人の絞首刑囚の物語』の序文でうまく言っている。“我々の不幸は、みんなが他人の心霊・生命・苦痛・習慣・意向・願望に対して、めったに理解しないか、ほとんどまったくしないことである。わたしは文学をやる者だが、わたしが文学が尊重さるべきものであると思うのは、つまりその最高の仕事は一切の境界と距離を払拭するからである”と。

※初出：1922年4月16日『農報副刊』